

きんちやく袋

田  
渕  
靖  
章

人物

権蔵

助六

石飛義三郎

梅

巨体の男

(19) 百姓

(23) 百姓

(30) 侍

(17) 権蔵の嫁

(25) 義三郎の家来

○石飛家の庭園

権蔵(27)、地面に座っている。

部屋の畳の上に石飛義三郎(30)、見下ろすように座っている

石飛「そのような話、到底聞き受ける事など  
できん」

権蔵「さようでございます！」

石飛「何でも出てくるきんちやく袋の話など、  
どう信用しろと言うのだ？」

権蔵、黙り込む。

石飛「権蔵よ、証拠を持ってまいれば、その  
話、聞き受けよう。出直して来い」

二人の侍、権蔵を外に連れ出す。

○石飛家の外

権蔵、扉の外に放り出される。

権蔵、立ち上がると、肩を落として離れて行く。

○小屋の中(夜)

権蔵、助六(23)、座っている。

権蔵「義三郎様の言ってる事はよく解る。

でもよ、他のお侍は、百姓は頭がないだの、嘘つきだなんて事ばかり言いやがる！」

助六「仕方ねえだろーが。そんな話信じられっこねえよ」

権蔵「だけんど、おめえだつて見たろ？」

助六「ああ。この目でしつかりと見たさ」

権蔵「じゃあなんで黙ってたんだ。オラと一緒に説得してくれたっていいじゃねえか」

助六「そんな事すりゃー、おめーみてえに頭のおかしなヤツだつて怪しまれて、村に居場所がなくなつちまうだろうが」

権蔵「でも嘘じゃねえんだぞ」

助六「信じるわけねえべ。青い狸が腹につけたきんちやく袋から大きなふすまを出して、開けたら遠く離れた奥州の城があったなんて言や、頭のおかしなヤツだ」

権蔵、助六に近寄る。

権蔵「頼む。義三郎様のとこさ行って、一緒

に説得してくれ」

助六、悲しそうな表情を浮かべる。

助六「勘弁してくれ。俺にだって嫁に子供がいんだよ」

権蔵、怒ったように外に出て行く。

### ○小屋の外（夜）

権蔵、家から出て来る。

近くにいる二人の百姓、権蔵に気づく。

百姓 A 「おい、頭のおかしな権蔵が出て来たぞ」

と、百姓 B と笑う。

権蔵、無視して二人を背にして歩く。

百姓 A 「青い狸が言葉を話して、頭に竹の羽を付けて空をスズメっこみたいに飛んでくだってよ」

と、更に百姓 B と笑う。

権蔵、早歩きをして離れる。

### ○権蔵の家の中（夜）

権蔵、家の中に入って来る。

額にぬれた手ぬぐいが置かれ、苦しもうに眠っている梅(17)の横に座る。

梅、目を覚まし権蔵を見る。

権蔵「どうだ」

梅、何かを言おうとする。

権蔵、梅の口元に耳を近づけて聞く。

権蔵「何言ってるんだ。大丈夫に決まったら。」

オラが何とかすんだからよ」

と、手ぬぐいを取ってその場を離れる。

権蔵の声「青い狸が持つてるきんちやく袋の中には、いろいろな物が入ってたんだ。義三郎様に知らせりや、たつくさーん褒美がもらえら。そしたら、お前を医者に連れて行ける。待ってるよ」

と、戻って来ると、新しい手ぬぐいを梅の額に置く。

○川岸(夜)

大雨が降っている。

権蔵、泣きそうな表情で雨に打たれながら立っている。

助六、隣に立って川を見ている。

権蔵「どうしておてんと様ってのは、こーんなに冷酷なんだろうな……」

助六「気を落とすな権蔵。こんな事もあらー」

権蔵、助六に掴みかかる。

権蔵「何が気を落とすなだ！おめえが青い狸の事で、もう少し協力してくれたら、お梅は間に合ったかもしれないぞ！」

助六、抵抗しもみ合いになる。

助六「捕まえでもしなきゃそんなもん誰も信じねえべや！」

権蔵「オラは探した！おめえがあの時、一緒に青い狸さ探してくれさえすれば、見つかったかもしれないぞ！そすたらおらのお梅は、お梅は、おらのお梅は……」

と、地面に膝をつき、泣き崩れる。

助六「へっ。大の男がみつともねえ！」

と、よれた服をもどして、権蔵に背を

向け草むらの方を向く。

草村が少し揺れ動き音がする。

助六、草村の方を見て目を見開く。

泣き続けている権蔵。その背後を、助

六、足音を立てないように歩いて行き、

草村の中に入る。

数秒後、草村の中から顔だけを出す。

助六「おっ、おい権蔵！青い狸だ。青い狸が

ここで寝てるぞ！」

権蔵、泣き止み、立ち上がって助六の

方を向く。

呆然と助六を見るが、顔を逸らす。

助六「どしたんだ？」

権蔵「もうお梅はいねえ。青い狸なんて、ど

うでもいい」

と、地面を見てため息を吐く。

金属に岩が当たる甲高い音が響き渡る。

権蔵、驚いて草村の方を見る。

助六、草村から、きんちやく袋を片手

に出て来る。



権蔵「おめえ、何しただ……」

助六、きんちやく袋を見せてニヤつく。

助六「これがあれば、何だつてできる」

助六、地面を蹴るように踏みつける。

権蔵「この罰当たりが！なんて事すんだ！」

助六「バカ野郎。こんなひもじい生活させられて、草みたいな食い物ばつか食わされて、年貢まで取られ続けてんだ。お前の妻も、なんで死んだか考えてみれ！」

権蔵「だからって……」

助六、馬鹿にするように鼻で笑う。

助六「これ使つて天下を取つてやる」

と、きんちやく袋の中に手を入れ、中から物を取りだし、地面に捨てていく。地面に懐中電灯のような物が落ちる。助六、きんちやく袋の中から、小さなプロペラのついた棒を取り出す。

助六「おっ」

と、竹のプロペラを顔に近づけて見る。

助六「そうそう。これを頭につけてたな」

と、頭につける。

プロペラについている、小さなボタンを押す。

プロペラが回転すると、遠心力で助六の頭が右に曲がり、骨の折れる音がすると同時に、首をつられた死体のような姿で空に飛んで行ってしまう。

権蔵「助六！」

と、助六が飛んでいった場所に走って行き、空を見上げる。

助六は消え、雷が光り、響き渡る。

権蔵「なんてこった」

と、黙り込み、雨に打たれ続ける。

権蔵、落ちている懐中電灯を拾う。

権蔵「確か、こりやーどんなものでも虫けらみてえに小さくしちまう道具だったな」

と、考え込むように黙ると、一点を見て生唾を飲み込む。

○石飛家の中庭

権蔵、庭の地面に座っている

石飛、部屋の畳の上に座っている。

石飛「よいだろう。そこまで言うのであれば、

聞き受けよう」

権蔵「ありがとーござーます」

と、深く頭を下げる。

下を向いた顔には不敵な笑みが浮かんで  
んでいる。

石飛「よし。ならば、その道具とやらで戦つて、おぬしの言った通り、打ち勝つ事ができたならば、どのような望も叶えてやろう」

侍「しかし義三郎様」

石飛「連れてまいれ！」

近くに座っている侍、部屋から出て行く  
くと、人相の悪い巨体の男(25)を連れて  
戻って来る。

巨体の男、権蔵の前にやって来る。

権蔵、巨体の男、構えて向き合う。

石飛「よし。始め！」

巨体の男、刀を抜いて、権蔵に切りか

かる。

権蔵、カウボーイの様に腹から懐中電灯を取りだし、巨体の男に光を当てる。巨体の男、どんどん大きくなっていき、6倍程の大きさになる。

権蔵、巨体の男を呆然と見上げる。

巨体の男、自分の体を驚くように見る。

権蔵「おっ、おっきくなっちまった……」

石飛、呆然と巨体の男を見上げている。

石飛「なんと、おぬしにはそのような取り柄があつたのか」

と、うれしそうに目を輝かせる。

権蔵、困つたように石飛を見る。

権蔵に、巨体の男の巨大な影が近づいて来る。

権蔵、巨体の男の方を見上げた瞬間に、悲鳴を上げ、巨体の男の足に踏み潰されてしまう。

石飛、立ち上がる。

石飛「お見事！」

田  
渕  
靖  
章